

第一段 (初冠)

むかし、男うるかうぶり(初冠)して、奈良の京、春日の里に、しるよして、狩りに往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりけるかりぎぬ(狩衣)のすそ(裾)を切りて、歌を書きてやる。その男、しのぶずり(信夫摺)のかりぎぬ(狩衣)をなむ着たりける。

春日野の若紫のすりごろも

しのぶの乱れかぎりしられず

となむ追ひつきて言ひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ。

みちのく(陸奥)のしのぶもぢ摺り誰ゆゑに

乱れそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

第二段 (眺め暮しつ)

むかし、男ありけり。奈良の京は離れ、この京は人の家まだ定まらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。それをかのみめ男、うち物語らひて、帰り来て、いかゞ思ひけむ、

時はやよひのついたち、雨そほふるにやりける。

起きもせず寝もせで夜を明かしては

春のものとして眺め暮しつ

第三段 (ひじき藻)

むかし、男ありけり。けさう(懸相)じける女のもとに、ひじきも

(藻)といふものをやるとて、

思ひあらばむぐら(葎)の宿にねもしなむ

ひじきのものには袖をしつゝも

二条のきさき(后)の、まだみかど(帝)にも仕うまつりたまはで、
たゞ人にておはしましける時のことなり。

第四段 (西の対)

むかし、ひんがしの五条に、おほきさい(太后)の宮おはしましける、西のたい(対)に住む人ありけり。それをほいにはあらで、こころざし深かりける人、ゆきとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、なほうしと思ひつゝなむありける。またの年の睦月に梅の花ざかりに、こぞ(去年)を恋ひていきて、立ちて見、みて見、見れど、こぞ(去年)に似るべくもあらず。うち泣て、あばらなる板敷に、

月のかたぶくまでふせてりて、こそぞ（去年）を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ

わが身は一つもとの身にして

とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣くかへりにけり。

第五段 （関守）

むかし、男ありけり。ひんがしの五条わたりにいと忍びていきけり。みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、わらべのふみあけたるついでいひぢ（築泥）のくづれより、通ひけり。人しげくもあらねど、たび重なりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜毎に人をすゑて、まもらせければ、いけどもえ逢はでかへりけり。さてよめる。

人知れぬわが通ひ路の関守は

よひよひ（宵々）ごとにうちも寝ななむ

とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじゆえしてけり。二条の後に忍びてまゐりけるを、世の聞えありければ、せうとたちのまもらせ給ひけるとぞ。

第六段 （芥河）

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわた

りけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きにきけり。芥河といふ河を
る(率)ていきければ、草のうへにおきたりける露を、かれは何ぞとな
む男に問ひける。ゆくさきおほく、夜もふけにければ、鬼ある所とも知
らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵
に、女をば奥におし入れて、男、弓、やなぐひを負ひて、戸口にをり。
はや夜も明けなむと思ひつゝ、ゐたりけるに、鬼一口に食ひてけり。あ
なやといひけれど、神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆ
くに、見れば、ゐ(率)て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひな
し。

白玉かなにぞと人の問ひし時

露とこたへて消えなましものを

これは、二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにて
ゐたま(給)へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて
負ひて出でたりけるを、御せうとほりかはのおとゞ(堀河の大臣)、た
らうくにつね(太郎国経)の大納言、まだ下らう(臈)にて内裏へまゐ
り給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とゞめてとり返し給うて
けり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うてきさき(后)の
たゞにおはしける時とや。

第七段 (尾張のあはひ)

むかし、男ありけり。京にありわびて東にいきけるに、伊勢・尾張の
あはひの海づらを行くに、浪のいと白くたつを見て、

いとゞしく過ぎ行く方の恋しきに

うらやましくもかへる浪かな

となむよめける。

第八段 (浅間の嶽)

むかし、男ありけり。京や住み憂かりけむ、あづまのかたにゆきて住み所もとむとて、ともとする人、ひとりふたりしてゆきけり。信濃の国、浅間のたけ(嶽)に、けぶりの立つを見て、

信濃なる浅間のたけ(嶽)にたつ煙

をちこち人の見やはとがめぬ

第九段 (八橋)

むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらし。あづまの方に住むべき国もとめにとて往きけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくてまどひいきけり。三河の国八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木のかげにおり居て、かれないひ(鮎)くひけり。その沢に、かきつばた(燕子花)いとおもしろく咲たり。それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五文字を句のかみにすみて、旅の心をよめといひければ、よめる。

から(唐)衣きつゝなれ(馴)にしつましあれば
はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人かれないひ(餉)のうへに涙おとしてほとびにけり。

行き行きて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、つた(蔦)かへでは茂り、もの心ぼそく、すゞろなるめを見ることがと思ふに、す(修)行者あひたり。かゝる道はいかでかいまするといふを見れば見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、ふみかきてつく。

駿河なるうつ(宇津)の山辺のうつゝにも

夢にも人に逢はぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いとしろう降り。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか

鹿の子まだらに雪の降るらむ

その山は、こゝにたとへば、比叡の山をはたち(二十)ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける。

なほゆきゆきて武蔵の国と下つ総の国との中に、いとおほきなる河あり。それをすみだ(角田)河といふ。その河のほとりにむれるて、思ひやれば、かぎりなく、遠くも来にけるかな、とわびあへるに、渡守、はや舟に乗れ。日も暮れぬといふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折りしも、白き鳥のはし(嘴)とあし(脚)とあかき、しぎ(鳴)のおほきさなる、水のうへ

に遊びつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡守に問ひければ、これなむ都鳥といふを聞きて、

名にしおはゞいざこと問はむ都鳥

わが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。

第十段 (みよし野)

むかし、男、武蔵の国までまどひありきけり。さてその国にある女をよばひけり。父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人、心ついたりける。父はなほびとにて、母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人と思ひける。このむこがねによみておこせたりける。住む所なむ人間のこほり(郡)み吉野の里なりける。

みよし野のたのむのかり(雁)もひたぶるに

君が方にぞ寄ると鳴くなる

むこがね、返し、

わが方に寄ると鳴くなるみよし野の

たのむのかり(雁)をいつか忘れむ

となむ。人の国にても、なほかゝることなむやまざりける。

第十一 段 (空ゆく月)

むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、道よりいひおこせける。

忘るなよほどは雲居になりぬるとも

空ゆく月のめぐりあふまで

第十二 段 (武蔵野)

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、武蔵野へる(率)てゆく程に、盗人なりければ、国の守にからめられにけり。女をば草むらのなかにおきて逃げにけり。道くる人、この野は盗人あなりとて火つけむとす。女わびて、

武蔵野は今日はな焼きそ若草の

つまもこもれりわれもこもれり

とよみけるを聞きて、女をばとりて、ともにる(率)てけり。

第十三 段 (むさしあぶみ)

むかし、武蔵なる男、京なる女のもとに、聞ゆれば、恥し、聞ねば苦しと書いて、上書にむさしあぶみ(武蔵鎧)と書いて、おこせてのち、

おともせずなりにければ、京より女、

むさしあぶみ（武蔵鎧）さすがにかけて頼むには
問はぬもつらし問ふもうるさし

とあるを見てなむ、堪へがたき心地しける。

問へば言ふ問はねば恨むむさしあぶみ（武蔵鎧）
かゝる折にや人は死ぬらむ

第十四段 （陸奥の国）

むかし、男、みちのくに（陸奥の国）にすゞろに行きいたりけり。そ
こなる女、京のひとはめづらかにおぼへけむ、せちに思へる心なむあり
ける。 さてかの女、

なかなか恋に死なずはくはこ（桑子）にぞ
なるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞ、ひなびたりける。さすがにあはれとや思ひけむ、いきてね
にけり。夜ふかくいでにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくたかけ（鶏）の
まだきに鳴きてせなをやりつる

といへるに、男京へなむまかるとて、

くりはら（姉齒）のあねはの松の人ならば
都のつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、おもひけらしとぞいひ居りける。

第十五段 （しのぶ山）

むかし、みちのくに（陸奥の国）にて、なでふ事なき人のめに通ひけるに、あやしうさやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

しのぶ山しのびて通ふ道もがな

人の心の奥も見るべく

女かぎりなくめでたしと思へど、さるさかなきえびすごゝろを見ては、いかゞはせむは。

第十六段 （紀有常）

むかし、きのありつね（紀有常）といふ人ありけり。みよのみかど

（三代の帝）に仕うまつりて時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人のごともあらず。人がらは心うつくしく、あてはかなることを好みて、こと人にもにず。貧しくへても、なほ昔よかりし時の心ながら、世の常のこともしらず。としごろあひなれたる妻、やうやうとこ離れて、つひに尼になりて、姉のさきだちてなりたるところへ行くと、男まことにむつまじきことこそなかりけれ、いまはとゆくをい

とあはれと思ひけれど、貧しければ、するわざもなかりけり。思ひわびて、ねむごろにあひ語らひける友だちのもとに、かうかう今はとてまかるを、何事もいさゝかなることとせせで、つかはすことと書きて、おくに、

手を折りてあひ見しことを数ふれば

十といひつゝ四つはへにけり

かの友だちこれを見て、いとあはれと思ひて、夜のものまでおくりてよめる。

年だにも十とて四つは経にけるを

いくたび君を頼み来ぬらむ

かくいひやりたりければ、

これやこの天の羽衣むべしこそ

君がみけし（御衣）と奉りけれ

よろこびに堪へで、又、

秋や来る露やまがふと思ふまで

あるは涙の降るにぞありける

第十七段 （年にまれなる人）

年ごろおとづれざりける人の、桜の盛りに見に來たりければ、ある

じ、

あだなりと名にこそたてれ桜花
年にまれなる人も待けり

返し、

今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし
消えずはありとも花と見ましや

第十八段 (白菊)

むかし、なま心ある女ありけり。男ちかうありけり。女、歌よむ人なりければ、心みむとて、菊の花のうつろへる折りて、男のもとへやる。

紅にほふはいづら白雪の

枝もとをゝに降るかとも見ゆ

男、知らずよみにける。

紅にほふがうへの白菊は

折りける人の袖かとも見ゆ

第十九段 (天雲のよそ)

むかし、男、宮仕へしける女の方に、ごたち(御達)なりける人をあ

ひ知りたりける。ほどもなくかれにけり。おなじ所なれば、女の目には見ゆるものから、男はあるものかと思ひたらず。女、

天雲のよそにも人のなりゆくか

さすがに目には見ゆるものから

とよめりければ、男、返し、

天雲のよそにのみしてふ（経） ることは

わが居る山の風はやみなり

とよめりけるは、また男ある人となむいひける。

第二十段 （楓のもみぢ）

むかし、男、大和にある女を見てよばひてあひにけり。さてほどへ（経）て、宮仕へする人なりければ、かへりくる道に、やよひ（三月）ばかりに、かへでもみぢの、いとおもしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる。

君がためた（手）折れる枝は春ながら

かくこそ秋の紅葉しにけれ

とてやりたりければ返り事は、京にきつきてなむもてきたりける。

いつの間に移ろふ色のつきぬらむ

君が里には春なかるらし

第二十一段 (思ふかひなき世)

むかし、男をんな、いとかしこく思ひかはしてこと心なかりけり。さ
るを、いかなる事かありけむ、いさゝかなることにつけて、世の中をう
しと思ひて、出でていなむと思ひて、かかる歌をなむよみて、ものに書
きつけける。

いでていなば心かるしと言ひやせむ

世のありさまを人は知らねば

とよみおきて、出でていにけり。この女かく書きおきたるを、けし
う、心おくべきことを覚えぬを、なによりてかかゝらむと、いといた
う泣きて、いづ方に求めゆかむと、門にいでて、とみかうみ、見けれ
ど、いづこをはかりとも覚えざりければ、かへりいりて、

思ふかひなき世なりけり年月を

あだに契りて我や住まひし

といひてながめをり。

人はいさ思ひやすらむ玉かづら

面影にのみいとゞ見えつゝ

この女、いとひさしくありて、念じわびてにやありけむ。いひおこせ
たる。

今はとて忘るゝ草のたねをだに
人の心にまかせずもがな

返し、

忘草植ふとだに聞くものならば

思ひけりとは知りもしなまし

またまたありしよりけにいひかはして、をとこ、

忘るらむと思ふ心のうたがひに

ありしよりけにもものぞかなしき

返し、

なかぞら（中空）に立ちゐる雲のあともなく

身のはかなくもなりにけるかな

とはいひけれど、おのが世々になりにつければ、うとくなりにつけり。

第二十二段（千代を一夜）

むかし、はかなくて絶えにけるなか、なほや忘れざりけむ、女のも

とより、

憂きながら人をばえしも忘れねば

かつ恨みつゝなほぞ恋しき

といへりければ、さればよといひて、男、

あひ見ては心ひとつをかは島の

水の流れて絶えじとぞ思ふ

とはいいけれど、その夜いにけり。いにしへゆくさきのことどもなど
いひて、

秋の夜のちよ（千夜）をひとよ（一夜）にならずらへて

やしよ（八千夜）し寝ばや飽く時のあらむ

返し、

秋の夜のちよ（千夜）をひとよ（一夜）になせりとも

ことば残りて鳥や鳴きなむ

いにしへよりもあはれにてなむ通ひける。

第 二十三 段 （筒井筒）

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になりければ、男も女も、はぢかはしてありけれど、男は、この女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつゝ、親のあはすれど聞かでないむありける。さて、この隣の男のもとよりかくなむ。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ

過ぎにけらしな妹見ざる間に

女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ

君ならずして誰かあぐべき

などいひいひて、つひにほいのごとくあひにけり。さて年ごろふるほどに、女、親なく、たよりなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内の国、高安の郡に、いきかよふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしとおもへるけしき(気色)もなくていだしやりければ、男こと心ありて、かゝるにやあらむと思ひうたがひて、せんざい(前栽)の中にかくれるて、河内へいぬる顔にて見れば、この女いとうけさうじて、うちながめて、

風吹けば沖つ白浪龍田山

夜は(半)にや君がひとり越ゆらむ

とよみけるをきゝて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。まれまれかの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて、てづからいるがひ(飯匙)とりてけこ(筒子)のうつはものにもりけるを見て、心うがりていかずなりけり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つゝをゝ(居)らむ生駒山

雲な隠しそ雨は降るとも

といひて見だすに、からうじてやまと(大和)人来むといへり。よろ

こびて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むと言ひし夜毎に過ぎぬれば

頼まぬものゝ恋ひつゝぞぬ(経)る

といへけれど、男すまずなりにけり。

第 二十四 段 (梓弓)

むかし、男かた田舎に住みけり。男宮仕へしにとて、別れ惜しみてゆきにけるまゝに、三とせ来ざりければ、待ちわびたるけるに、いとねむごろにいひける人に、今宵あはむとちぎりたりけるに、この男きたりけり。この戸あけ給へとたゝきけれど、あけで、歌をなむよみていだしたりける。

あらたまの年の三とせ(年)を待ちわびて

たゞこよひこそにゐまくらすれ(新枕すれたゞ今宵こそ)

といひだしたりければ、

梓弓ま弓つき弓年を経て

わがせしがごとうるはしみよせ

といひて、いなむとしければ、女、

梓弓引けど引かねど昔より

心は君に寄りにしものを

といひけれど、男かへりにけり。女いとかなしくて、後にたちて追ひゆけど、え追ひつかで、清水のある所にふしにけり。そこなりける岩に、およびの血して、書きつける。

あひ思はで離れぬる人をとゞめかね

わが身は今ぞ消え果てぬめる

書きて、そこにいたづらになりにけり。

第二十五段 (逢はで寝る夜)

むかし、男ありけり。あはじともいはざりける女の、さすがなりけるがもとにいひやりける。

秋の野に笹分けし朝の袖よりも

あはでぬ(寝)る夜ぞひぢまさりける

色好みなる女、返し、

みるめなきわが身を浦と知らねばや

か(離)れなであま(海人)の足たゆく来る

第二十六段 (もろこし船)

むかし、男五条わたりなりける女をえ得ずなりにける事とわびたりける、人の返り事に、

思ほえず袖にみなとの騒ぐかな
もろこし舟の寄りしばかりに

第二十七段 (たらひの影)

むかし、男、女のもとにひと夜いきて、又もいかずなりにければ、女の、手洗ふ所に、ぬきす(貫簀)をうちやりて、たらひのかげに見えけるを、みづから、

我ばかりもの思ふ人はまたもあらじと
思へば水の下にもありけり

とよむを、来ざりける男、立ち聞きて、

みなくち(水口)にわれや見ゆらむかはづ(蛙)さへ
水の下にてもろこゑ(声)に鳴く

第二十八段 (あふごかたみ)

むかし、色好みなりける女、出でていにければ、
などてかくあふごかたみになりにつむ

水も（漏）らさじと結びしものを

第二十九段 （花の賀）

むかし、春宮の女御の御方の花の賀に、めしあづけられたりけるに、

花に飽かぬなげきはいつもせしかども

今日のこよひに似る時はなし

第三十段 （はつかなりける女）

むかし、男、はつかなりける女のもとに、

あふことは玉の緒ばかりおもほえて

つらき心のながく見ゆらむ

第三十一段 （よしや草葉よ）

むかし、宮の内にて、あるごたちのつばね（御達の局）のまへをわたりけるに、なにのあたにか思ひけむ、よしや草葉よ、ならむさが見むといふ。男、

つみもなき人をうけへば忘草

おのがうへにぞ生ふといふなる

といふを、ねたむ女もありけり。

第三十二段 (しずのおだまき)

むかし、ものいひける女に、年ごろありて、

いにしへ(古)のしづのをだまきくりかへし

昔を今になすよしもがな

といへりけれど、なにとも思はずやありけむ。

第三十三段 (こもり江)

むかし、男、津の国、むぼらのこほりにかよひける女、このたびいき
ては、又は来じと思へるけしきなれば、男、

芦辺よりみち来るしほのいやましに

君に心を思ひますかな

返し、

こもり江に思ふ心をいかでかは

舟さす棹のさして知るべき

田舎人のことにては、よしやあしや。

第三十四段 (つれなかりける人)

むかし、男、つれなかりける人のもとに、

いへばえにいはねば胸に騒がれて

心ひとつに嘆くころかな

おもなくていへるなるべし。

第三十五段 (玉葛)

むかし、心にもあらで絶えたる人のもとに、

玉の緒をあはおによりてむすべれば

絶えてののちも逢はむとぞ思ふ

第三十六段 (あわ緒)

むかし、忘れぬるなめりと問ひ事しける女のもとに、

谷せばみ峯まではへる玉かづら
絶えむと人にわが思はなくに

第三十七段 (下紐)

むかし、男、色好みなりける女に逢へりけり。うしろめたくや思ひけ
む、

我ならで下紐解くな朝顔の

夕影待たぬ花にはありとも

返し、

ふたりして結びし紐をひとりして
あひ見るまでは解かじとぞ思ふ

第三十八段 (恋といふ)

むかし、紀有常が行きたるに、ありきて遅く来けるに、よみてやり
ける。

君により思ひならひぬ世の中は

人はこれをや恋問いふらむ

返し、

ならばねば世の人ごとになにをかも
恋とはいふと問ひし我しも

第三十九段 (源の至)

むかし、西院のみかどと申すみかどおはしましりけり。その帝のみこ、たかいこ(崇子)と申すいまそがりけり。そのみこうせ給ひて、おほむはふり(御葬)の夜、その宮の隣なりける男、いまそかり見むとて、女車にあひ乗りて出でたりけり。いと久しうゐ(率)ていでたてまつ(奉)らず。うち泣きてやみぬべかりけるあひだに、あめ(天)の下の色好み、源のいたる(至)といふ人、これももの見るに、この車を女車と見て、寄り来て、とくなくまめくあひだに、かのいたる(至)、螢をとりて女の車に入れたりけるを、車なりける人、この螢のともす火にや見ゆらむ、ともし消ちなむずるとて、乗れる男のよめる。

出でていなばかぎりなるべみとしけち

年へぬるかとなく声を聞け

かのいたる、返し、

いとあはれなくぞ聞ゆるともしけち

消ゆるものとも我は知らずな

天の下の色好みの歌にては、なほぞありける。至はしたがふがおほぢなり。みこの本意なし。

第四十段 (すける物思ひ)

むかし、若き男、けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくとして、この女をほかへをひやらむとす。さこそいへ、まだをひやらず。人の子なれば、まだ心いきほひなかりければ、とどむるいきほひなし。女もいやしければ、すまふ力なし。さる間に思ひはいやまさりにまさる。にはかに親この女を、(逐)ひうつ。男、血の涙をながせども、とどまるよしなし。ゐて出でていぬ。男、泣く泣くよめる。

いでゝいなば誰か別れのかたからぬ

ありしにまさるけふは悲しも

とてよみて絶え入りにけり。親あわてにけり。なほ思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに、しんじち(真実)に絶え入りにければ、まどひて願立てけり。今日のいりあひ(入相)ばかりに絶え入りて、又の日のいぬ(戌)の時ばかりになむ、辛うじていき出でたりける。むかしの若人は、さる好けるもの思ひをなむしける。今の翁まさにしなむや。

第四十一段 (紫)

むかし、女はらからふたりありけり。ひとりはいやしき男の貧しき、ひとりはある男もちたりけり。いやしき男もたる、師走のつごもりにうへのきぬ(上の衣)を洗ひて、手づから張りけり。志はいたしけれ

ど、さる賤しき業も慣はざりければ、うへのきぬ（上の衣）の肩を張り破りてけり。せむ方もなくてたゞ泣きに泣きけり。これを、かのあてなる男聞きて、いと心苦しかりければ、いと清らかなるろうさうのうへのきぬ（上の衣）を見出でてやるとて、

紫の色濃き時はめもはるに

野なる草木ぞわかれざりける

武蔵野の心なるべし。

第四十二段 （誰が通ひ路）

むかし、男色好みと知る知る女をあひ言へりけり。されど憎くはたあらざりけり。しばしばいきけれど、なほいと後めたく、さりとて、いかではた得あるまじかりけり。なほはた得あらざりけるなかなりければ、二日三日ばかり、さはることありて、えいかでかくなむ。

出でて来しあとだに未だかはらじを

誰が通ひ路と今はなるらむ

もの疑はしきに詠めるなりけり。

第四十三段 （名のみ立つ）

むかし、かやのみこ（賀陽親王）と申すみこ（親王）おはしましけ

り。そのみこ（親王）、女をおぼしめして、いとかしこ（賢）うめぐみ
（恵）つかう給ひけるを、人なまめきて有りけるを、我のみと思ひける
を、又人聞きつけて、文やる。ほととぎすの形を書きて、

ほととぎすなが泣く里のあまたあれば

なほうとまれぬ思ふものから

といへり。この女、気色をとりて、

名のみたつしでのたおきはけさぞ鳴く

いほりあまたうとまれぬれば

時はさ月になむありける。男返し、

いほり多きしでのたおさはなほ頼む

わが住む里に声し絶えずは

もの疑はしさに詠めるなり。

第 四十四 段 （馬のはなむけ）

むかし、あがた（梟）へゆく人に馬のはなむけせむとて、呼びて、う
とき人にしあらざりければ、いゑとうじ（家刀自）、盃さゝせて女の装
束かづけむとす。あるじの男、歌詠みて、ものこし（裳の腰）に結ひつ
けさす。

いでてゆく君がためにと脱ぎつれば

我さへもなくなりぬべきかな

この歌は、あるがなかに面白ければ、心とゞめてよまず、腹に味はひて。

第四十五段 (行く蛍)

むかし、男ありけり。人の娘のかしづく、いかでこの男にも言はむと思ひけり。うちいでむことかたくやありけむ、もの病になりて死ぬべきときに、かくこそ思ひしかといひけるを、親聞きつけて、泣く泣く告げたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれとこも

(籠)りをりけり。時は水無月のつごもり、いと暑きころほひに、宵はあそびをりて、夜は更けてや、涼しき風吹きけり。蛍高く飛びあがる。この男、見ふせりて、

行く蛍雲の上までいぬべくは

秋風吹くとかりに告げこせ

暮れがたき夏のひぐらしながむれば

そのことゝなくものぞ悲しき

第四十六段 (うるはしき友)

むかし、男、いとうるはしき友ありけり。かた時去らずあひ思ひけるを、人の国へいきけるを、いとあはれと思ひて別れにけり。月日経てお

こせたる文に、あさましくえたいめん（対面）せで月日のへ（経）にけること。忘れやし給ひにけむと、いたく思ひわびてなむ侍る。世の中の人の心は、目離るれば忘れぬべきものにこそあめれ。といへりければ、よみてやる。

目離るともおもほえなくに忘らるゝ

時しなければ面影にたつ

第四十七段 （おほぬさ）

むかし、男、ねむごろにいかでと思ふ女ありけり。されど、この男をあだなりと聞きて、つれなさのみまさりつゝいへる。

おほぬさ（大幣）のひく手あまたになりぬれば

思へどこそ頼まざりけれ

返し、男、

おほぬさ（大幣）と名にこそたてれ流れても

つひによる瀬はありといふものを

第四十八段 （人待たむ里）

むかし、男ありけり。むま（馬）のはなむけせむとて、人を待ちけるに、来ざりければ、

今ぞ知る苦しきものと人待たむ
里をばか(離)れずとふ(訪)べかりけり

第 四十九 段 (若草)

むかし、男、いもうと(妹)のいとをかしげなりけるを見をりて、

うら若み寝よげに見ゆる若草を

人の結ばむことをしぞ思ふ

と聞えけり。返し、

初草のなどめづらしき言の葉ぞ

うらなくものを思ひけるかな

第 五十 段 (あだくらべ)

むかし、男ありけり。恨むる人を恨みて、

鳥の子をとを(十)づゝとを(十)は重ぬとも

思はぬ人をおもふものは

といへりければ、

朝露は消え残りてもありぬべし
誰かこの世を頼みはつべき

又、男、

吹く風にこそぞ（去年）の桜は散らずとも
あな頼みがた人の心は

又、女、返し、

ゆく水に数かくよりもはかなきは
思はぬ人を思ふなりけり

又、男、

ゆく水と過ぐるよはひと散る花と
いづれ待ててふことを聞くらむ

あだ比べ、かたみにしけるおとこ女の、忍びありきしけることなるべし。

第五十一段（菊）

むかし、男、人のせんざい（前栽）に菊植ゑけるに、

植ゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ
花こそ散らめ根さへ枯れめや

第 五十二 段 (かざりちまき)

むかし、男ありけり。人のもとより、かざりちまきおこせたりける返り事に、

あやめ刈り君は沼にぞまどひける

我は野に出でてかるぞわびしき

とて、きじをなむやりける。

第 五十三 段 (あひがたき女)

昔、男、逢ひがたき女にあひて、物語などするほどに、とり(鶏)の鳴きければ、

いかでかはとり(鶏)の鳴くらむ人しれず

思ふ心はまだ夜ぶかきに

第 五十四 段 (つれなかりける女)

むかし、男、つれなかりける女に言ひやりける。

行きやらぬ夢路を頼むたもとは
天つ空なる露やおくらむ

第 五十五 段 (言の葉)

むかし、男、思ひかけたる女の、え得まじうなりての世に、

思はずはありもすめらど言の葉の
をりふしごとに頼まるゝかな

第 五十六 段 (草の庵)

むかし、男、ふ(臥)して思ひ起きて思ひ、思ひあまりて、

わが袖は草のいほり(庵)にあらねども
暮るれば露の宿りなりけり

第 五十七 段 (恋ひわびぬ)

むかし、男、人知れぬ物思ひけり。つれなき人のもとに、

恋ひわびぬあまの刈る藻に宿るてふ
われから身をもくだきつるかな

第 五十八 段 (荒れたる宿)

むかし、心つきて色好みなる男、長岡といふ所に家造りてをりけり。その隣なりける、宮ばらに、こともなき女どもの、田舎なれければ、田刈らむとてこの男のあるを見て、いみじのすき者のしわざやとて集りていり来れば、この男、逃げて奥にかくれにければ、女、

荒れにけりあはれいく世の宿なれや

住みけむ人のおとづれもせぬ

といひて、この宮に集り来るてありければ、この男、

むぐら (葎) おひて荒れたる宿のうれたきは

かりにも鬼のすだ (集) くなり

とてなむいだしたりける。この女ども、ほ (穂) ひろはむといひければ、

うちわびて落穂ひろふときかませば

我もたづら (田面) にゆかましものを

第 五十九 段 (ひむがし山)

むかし、男、京をいかゞ思ひけむ。ひむがし (東) 山に住まむと思ひ

入りて、

住わびぬ今はかぎりと山里に

身をかくすべき宿をもとめてむ

かくて、ものいたく病みて、死に入りければ、おもてに水そゞぎなど
していき出でて、

わが上に露ぞ置くなる天の河

と(門)渡る船のかいのしづくか

となむいひて、いき出でたりける。

第六十段 (花橘)

むかし、男ありけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどのいへとうじ(家刀自)、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。この男、宇佐の使にていきけるに、ある国のしぞう(祇承)の官人のめ(妻)にてなむあると聞きて、女あるじにかはらけとせよ。さらずは飲まじといひければ、かはらけ取りいだしたりけるに、肴なりけるたちばな(橘)をとりて、

さつき待つ花橘の香をかげば

昔の人の袖の香ぞする

といひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。

第 六十一 段 (そめがわ)

むかし、男、つくし(筑紫)までいきたるに、これは色好むといふす
きものとすだれ(簾)のうちなる人の、いひけるを聞きて、

そめがわ(染河)を渡らむ人のいかでかは
色になるてふことのなからむ

女、返し、

名にし負はばあだにぞあるべきたはれ島
浪の濡れぎぬ(衣)着るといふなり

第 六十二 段 (こけるから)

むかし、年ごろおとづれぎりける女、心かしくやあらざりけむ。は
かなき人の言につきて、人の国になりける人に使はれて、もと見し人の
前にいで来て、物く(食)はせなどしけり。夜さり、このありつる人た
ま(給)へとあるじ(主)にいひければ、おこせたりけり。男、我をば
知らずやとて、

いにしへのほひはいづら桜花

こけるからともなりにけるかな

といふを、いとほづかしく思ひて、いらへもせでゐたるを、などいらへ

もせぬといへば、涙のこぼるゝに目もみえず、ものもいはれずといふ、

これやこの我にあふみをのがれつゝ

年月経れどまさり顔なき

といひて、きぬ（衣）ぬぎて取らせけれど、すてて逃げにけり。いづちいぬらむとも知らず。

第 六十三 段 （つくも髪）

むかし、世心づける女、いかで心情けあらむ男にあひえてしがなと思へど、言ひ出でむも頼りなきに、まことならぬ夢がたりをす。子三人を呼びて語りけり。二人の子は、情けなくいらへて止みぬ。三郎なりけむ子なむ、よき御男ぞいでこむとあはするに、この女けしき（気色）いとよし。こと人とはいと情けなし。いかでこのぎいごちゅうじやう（在五中將）にあはせてしがなと思ふ心あり。狩しありきけるにいきあひて、道にて馬の口をとりて、かうかうなむ思ふといひければ、哀れがりて、きて寝にけり。さてのち男見えざりければ、女、男の家にいきて垣間みけるを、男ほのかに見て、

ももとせ（百歳）にひとゝせ（一歳）たらぬつくも髪

われを恋ふらしおもかげに見ゆ

とて、出でたつけしき（気色）を見て、むばら（茨）からたちにかゝりて、家にきてうちふせり。男かの女のせしやうに、しのびて立てりてみれば、女嘆きて寝ぬとて、

さむしろ（狭席）に衣かたしき今宵もや

恋しき人に逢はでのみ寝む

と詠みけるを、男あはれと思ひて、その夜は寝にけり。世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人は、思ふをも思はぬをも、けぢめみせぬ心なむありける。

第 六十四 段 （玉簾）

むかし、男、みそかに語らふわざもせざりせば、いづくなりけむ、怪しきによめる。

吹く風にわが身をなさば玉すだれ

ひま求めつつ入るべきものを

返し、

取りとめぬ風にはありとも玉すだれ

誰が許さばかひもとむべき

第 六十五 段 （在原なりける男）

むかし、おほやけおぼしてつかう給ふ女の、色ゆるされたるありけり。おほみやすん（大御息所）とていますがりけるいとこなりけり。殿上にさぶらひける在原なりける男の、まだいと若かりけるを、この女あ

ひ知りたりけり。男、女方ゆるされたりければ、女のある所に来てむかひをりければ、女、いとかたはなり。身も滅ぶなむ、かくなせそ、といひければ、

思ふには忍ぶることぞ負けにける

逢ふにしかへばさもあらばあれ

といひて、ぎょうし(曹司)におり給へれば、例の、このみぎょうし(曹司)には、人の見るをもしら(知)でのぼりみければ、この女思ひわびて里へゆく。されば、何の、よきこととて思ひて、いき通ひければ、みな人聞きてわらひけり。つとめてとのもづかさ(主殿司)の見るに、くつ(杓)はとりて奥になげ入れてのぼりぬ。かくかたはにしつゝありわたるに、身もいたづらになりぬべければつひに滅びぬべしとて、この男、いかにせむ。我がかゝる心やめ給へとてほとけ神にも申しけれど、いやまさりにのみ覚えつつ、なほわりなく恋しうのみ覚えければ、おむやうじ(陰陽師)、かむなぎ(巫)よびて、恋せじといふはらへ(祓)のぐ(具)してなむいきける。はらへ(祓)けるまゝに、いとど悲しきこと数まさりて、ありしよりけに恋しくのみ覚えければ、

恋せじとみたらしがは(御手洗川)にせしみそぎ

神はうけずもなりにけるかな

といひてなむい(往)にける。このみかど(帝)は顔かたちよくおはしまして、仏の御名を、御心に入れて、御声はいと尊くて申し給ふを聞きて、女はいたう泣きけり。かゝる君に仕うまつらで、すくせ(宿世)つたなく悲しきこと、この男にほだされてとてなむ泣きにける。かゝるほどにみかど(帝)聞しめして、この男をば流しつかはしてければ、この女のいとこの御息所、女をばまかでさせて、蔵にこ(籠)めてしをり給うければ、蔵にこも(籠)りて泣く。

あまの刈る藻にすむ虫の我からと
音をこそなかめ世をばうらみじ

と泣きれば、この男、人の国より夜ごとに来つゝ、笛をいとおもしろく吹きて、声はをかしうてぞ、あはれにうたひける。かゝれば、この女は蔵にこも（籠）りながら、それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

さりともと思ふらむこそ悲しけれ
あるにもあらぬ身を知らずして

と思ひをり。男は女しあはねば、かくしありきつゝ人の国にありきてかくうたふ。

いたづらに行きては来ぬるものゆゑに
見まくほしさにいぎなはれつゝ

水のお（尾）の御時なるべし。おほみやすん（大御息所）もそめどの（染殿）の後なり。五条の後とも。

第 六十六 段 （みつの浦）

むかし、男、津の国にしる所ありけるに、あにおとゝ（兄弟）友達ひきゐて、難波の方にいきけり。渚を見れば、舟どものあるを見て、

難波津をけきこそみつの浦ごとに

これやこの世を海わたる舟

これをあはれがりて、人々かへりにけり。

第六十七段 (花の林)

むかし、男、せうえう (逍遥) しに、思ひど親いつらねて、いづみ (和泉) の国へきさらぎ (如月) ばかりにいきにけり。かうち (河内) の国いこまの (生駒) 山を見れば、曇りみ、晴れみ、たちゐる雲やま ず。あしたより曇りて、ひる晴れたり。雪いと白う木のすゑ (末) に降りたり。それを見て、かのゆく人のなかにたゞ一人よみける。

昨日けふ雲のたちまひかくろふは

花のはやしをう (憂) しとなりけり

第六十八段 (住吉の浜)

むかし、男、和泉の国へいきにけり。住吉の郡、住吉の里、住吉の浜 を行くに、いとおもしろければ、降りゐつゝ行く。ある人が住吉の浜と 詠めと言ふ。

かり (雁) 鳴きて菊の花さく秋はあれど

春のうみべに住吉の浜

と詠めりければ、みな人は詠まずなりけり。

第 六十九 段 (狩の使)

むかし、男ありけり。その男伊勢の国に、狩の使いにいきけるに、かの伊勢の齋宮なりける人の親、常の使よりは、この人、よくいたはれといひやりければ、親のことなりければ、いとねむごろ(懇)にいたはりけり。朝には狩にいだし立ててやり、夕きりは帰りつゝそこに来させけり。かくてねむごろ(懇)にいたづきけり。二日といふ夜、男、われてあはむといふ。女もはた、いと逢はじとも思へらず。されど、人目しげければ逢はず。つかひぎね(使実)とある人なれば、遠くも宿さず。女の寝屋近くありければ、女、人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに來たりけり。男はた寝らざりければ、と(外)の方を見いだして臥せるに、月のおぼろなるに、小さき童を先に立てて、人立てり。男いとうれしくて我が寝る所に、ゐ(率)ていり、ね(子)一つよりうしみ(丑三)つまであるに、まだ何事も語らはぬに、帰りにけり。男いと悲しくて、寝ずなりにけり。つとめていぶかしけれど、わが人をやるべきにしもあらねば、いと心もとなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより言葉はなくて、

君やこし我や行きけむおもほえず

夢かうつゝか寝てか醒めてか

男いといたう泣きてよめる。

かきくらす心の闇にまどひにき

夢うつゝ(現)とはこよひ定めよ

とよみてやりて、狩に出でぬ。野にありけれど心はそらにて、こよひだに人しづめて、いととく逢はむと思ふに、くにのかみ(国守)、いつきの(斎)宮のかみかけたる、狩の使ありと聞きて、夜ひと夜酒飲みしければ、もはら逢ひごともえせで、明けば尾張の国へたちなむとすれば、男も人知れず血の涙を流せどもえあはず。夜やうやう明けなむとするほどに、女方よりいだすさかづきの皿に、歌を書きていだしたり。とりて見れば、

かち人の渡れどぬれぬえ(江)にしあれば

と書きて、すゑ(末)はなし、そのさかづきの皿に、ついまつ(続松)の炭して歌のすゑ(末)を書きつぐ。

またあふさかの関は越えなむ

とて、明くれば、尾張に国へ越えにけり。斎宮は水の尾の御時、文徳天皇の御むすめ、これたかのみこ(惟喬の親王)の妹。

第七十段 (あまの釣船)

むかし、男、狩の使より帰り来けるに、大淀のわたりに宿りて、いつきの(斎)宮のわらはべにいひかけける。

みるめかるかた(方)やいづこそ棹さして

われに教へよあまの釣舟

第七十一段 (神のいがき)

むかし、男、伊勢の齋宮に、内の御使にて、まるれりければ、かの宮にすぎごといひける女、わたくし(私)事にて、

ちはやぶる神のいがきも越えぬべし

大宮人の見まくほしきに

男、

恋しくは来ても見よしかしちはやぶる

神のいさなむ道ならなくに

第七十二段 (大淀の松)

むかし、男、伊勢の国なりける女、又、えあはで、隣の国へいくとて、いみじう怨みければ、女、

大淀の松はつらくもあらなくに

うらみてのみもかへる波かな

第七十三段 (月のうちの桂)

むかし、そこにはありと聞けど、せうそこ（消息）をだにいふべくも
あらぬ女のあたりを思ひける。

目には見て手にはとられぬ月のうちの
桂の如き君にぞありける

第 七十四 段 （重なる山）

むかし、男、女をいたう怨みて、

岩根ふみかさなる山にはあらねど
逢はぬ日おほく恋ひわたるかな

第 七十五 段 （海松）

むかし、男、伊勢の国にゐ（率）ていきてあらむ、といひければ女、

大淀の浜に生ふてふみるからに
心はなぎぬかたらはねども

といひて、ましてつれなかりければ、男、

袖ぬれてあまの刈りほすわたつ海の
みるを逢ふにてやまんとやする

女、

岩間より生ふるみるめしつれなくは

しほひ（汐干）しほみち（汐満ち）かひもありなむ

また男、

涙にぞぬれつゝしぼる世の人の

つらき心は袖のしづくか

世にあふことかたき女になむ。

第七十六段（小塩の山）

むかし、二条の後の、まだ春宮のみやすん（御息）所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、このゑづかさ（近衛府）にさぶらひける翁、人々の禄たまはるついでに、御車より給はりて、よみて奉りける。

大原やをしほ（小塩）の山も今日こそは

神代のことと思ひいづらめ

とて、心にもかなしと思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし。

第七十七段（安祥寺のみわぎ）

むかし、田村のみかど（帝）と申すみかど（帝）おはしましけり。その時の女御、たかきこ（多賀幾子）と申すみまそかりけり。それ失せ給ひて、安祥寺にて、みわぎしけり。人々さゝげものたてまつ（奉）りけり。たてまつ（奉）りあつめたるものちさゝげ（千棒）ばかりあり。そこぼくのさゝげものを木の枝につけてだう（堂）の前にたてたれば、山もさらにだう（堂）の前にうごき出でたるやうに見える。それを、右大将にいまそかりけるふぢはらのつねゆき（藤原常行）と申すいまそかりて、かう（講）の終るほどに、歌を詠む人々を召しあつめて、けふのみわぎを題にて、春の心ばへある歌をたてまつ（奉）らせ給ふ。みぎのむまのかみ（右馬頭）なりける翁、目はたがひながらよみける。

山のみなうつりて今日に逢ふことは

春の別れをとふとなるべし

とよみたるけるを、いま見ればよくもあらざり。そのかみはこれやまさりけむ、あはれがりけり。

第七十八段 （山科の宮）

むかし、たかきこ（多賀幾子）と申す女御おはしましけり。失せ給ひて、なゝなぬか（七日）のみわぎ安祥寺にてしけり。右大将ふぢはらのつねゆき（藤原常行）といふ人いまそかりけり。そのみわぎにまうで給ひてかへさに、山科の禪師のみこ（親王）おはします、その山科の宮に、滝落し、水走らせなどして、おもしろく造られたるに、まうで給うて、年ごろよそにはつかうまつれど、近くはいまだつかう間つらず。こよひはこゝにさぶらはむと申し給ふ。みこ（親王）よろこび給うて、夜のおましの設けさせ給ふ。さるに、かの大将出でてたばかり給ふやう、

宮仕への初めに、たゞなほやはあるべき。三条のおほみゆき（大行幸）せし時、紀の国の千里の浜にありける、いとおもしろき石たてまつ（奉）れりき。おほみゆき（大行幸）のちたてまつ（奉）れりしかば、ある人のみぎうし（御曹司）のまへのみぞ（溝）にすゑたりしを、島好みたまふ君なり、この石をたてまつ（奉）らむとのたまひて、みずいじん（御隨身）、とねり（舎人）してとりにつかはす。いくばくもなく持てきぬ。この石聞きしよりは見るはまされり。これをたゞにたてまつ（奉）らばすゞろなるべしとて、人々に歌よませ給ふ。みぎのむまのかみ（右馬頭）なりける人のをなむ、青き苔をきぎみて蒔絵のかたに、この歌をつけてたてまつ（奉）りける。

あかねども岩にぞかふる色見えぬ
心を見せむよしのなければ

となむよめりける。

第七十九段 （千ひろあるかげ）

むかし、氏のなかに、親王生まれ給へけり。御うぶや（産屋）に人々うたよみけり。御おほぢがた（祖父方）なりける翁のよめる。

我が門に千尋ある陰を植えゑつれば
夏冬たれか隠れざるべき

これはさだかずのみこ（貞数の親王）。時の人、中条の子となむいひける。兄の中納言行平のむすめの腹なり。

第八十段 (おとろへたる家)

むかし、おとろへたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり。やよひのごもりに、その日雨そぼふるに、人のもとへ折りてたてまつ(奉)らすとて、よめる。

ぬれつゝぞしひて折りつる年のうちに

春はいくかもあらじと思へば

第八十一段 (しほがま)

むかし、左のおほいまうちぎみ(大臣)いまそかりけり。賀茂川のほとりに、六条わたりに、家をいと面白く造りて住み給ひけり。神無月のつごもりがた、菊の花うつろひさかりなるに、紅葉のちぐさ(千種)に見ゆる折、みこ(親王)たちおはしまさせて、夜ひと夜、酒のみし遊びて、夜あけもてゆくほどに、この殿のおもしろきをほむる歌よむ。そこにありけるかたる翁、だいしきの下にはひありきて、人にみなよませ果ててよめる。

塩釜にいつか来にけむ朝風に

釣りする舟はこゝによらなむ

となむよみけるは、みちの国にいきたりけるに、あやしくおもしろき所おほかりける。わが帝六十余国の中に、塩釜といふ所に似たるところなりけり。さればなむ、かの翁、さらにここをめでて、塩釜にいつか来

にけむとよめりける。

第 八十二 段 (渚の院)

むかし、これたかのみこ（惟喬の親王）と申すみこ（親王）おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時みぎのむまのかみ（右馬頭）なりける人を常に率ておはしましけり。時よ（世）へて久しくなりにぬれば、その人の名忘れにけり。狩はねむごろ（懇）にもせで酒をのみ飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。いま狩するかたの（交野）の渚の家、その院の桜いとおもしろし。その木のもとにおりゐて、枝を折りてかざしにさして、かみ、なか、しも、みな歌よみけり。むまのかみ（馬頭）なりける人のよめる。

世の中に絶えて桜のなかりせば

春の心はのどけからまし

となむよみたる。また、人の歌、

散ればこそいとゞ桜はめでたけれ

うき世になにか久しかるべき

とて、その木の下はたちてかへるに、日暮になりぬ。御とも（供）なる人、酒をもたせて、野より出できたり。この酒を飲みてむとて、よき所を求め行くに、天の河といふ所にいたりぬ。みこ（親王）にむまのかみ（馬頭）おほみきまゐる。みこ（親王）ののたまひける、かたの（交野）を狩りて、天の河のほとりにいたる題にて、歌よみて杯はさせとの

たまうければ、かのむまのかみ（馬頭）よみて奉りける。

狩り暮らしたなばたつめに宿からむ

天の河原に我は来にけり

みこ（親王）歌をかへすがへす誦じ給うて返しえし給はず。きのあり
つね（紀有常）御とも（供）につこ（仕）うまつれり。それがかへし、

ひとゝせ（一年）にひとたび来ます君までば

宿かす人もあらじとぞ思ふ

かへりて宮に入らせたま（給）ひぬ。夜ふくるまで酒飲み物語して、
あるじのみこ（親王）、ゑひて入りたま（給）ひなむとす。十一日の月
もかくれなむとすれば、かのむまのかみ（馬頭）のよめる。

あかなくにまだきも月のかくるゝか

山のは（端）にげて入れずもあらなむ

みこ（親王）にかはりたてまつ（奉）りて、きのありつね（紀有
常）、

おしなべて峯もたひらになりななむ

山のは（端）なくは月もいらじを

第 八十三 段 （小野の雪）

むかし、水無瀬にかよひ給ひしこれたかのみこ（惟喬の親王）、れい

の狩しにおはします供にうまのかみ（馬頭）なる翁つかうまつれり。日ごろへて宮にかへり給うけり。御送りしてとくいなむと思ふに、おほきみたまひろくたま（禄賜）はむとて、つかはさざりけり。このむまのみ（馬頭心）もとながりて、

枕とて草ひき結ぶこともせじ

秋の夜とだにたのまれなくに

とよみける。時はやよひのつごもりなりけり。みこおほとのごも（大殿籠）らであかし給うてけり。かくしつゝまうで仕うまつりけるを、思ひのほか、御髪おろし給うてけり。正月にをがみたてまつらむとて、小野にまうでたるに比叡の山のふもとなれば、雪いとたかし。しひてみむろ（御室）にまうでてをがみたてまつるに、つれづれといとものがなしくておはしましければ、やゝ久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひ出で聞えけり。さてもさぶらひてしがなと思へど、おほやけごと（公事）どもありければ、えさぶらはで、夕暮にかへるとて、

忘れては夢かぞとおもふ思ひきや

雪ふみわけて君を見むとは

とてなむ泣く泣く来にける。

第 八十四 段 （さらぬ別れ）

むかし、男ありけり。身はいやしなから、母なむ宮なりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。ひとつ子さへありければ、いとかなしうし

給ひけり。さるに、しはすばかりに、とみの事とて、御ふみあり。
おどろきて見れば、うたあり。

老いぬればさらぬ別れのありといへば

いよいよ見まくほしく君かな

かの子、いたううちなきてよめる。

世の中にさらぬ別れのなくもがな

千代もといのる人の子のため

第 八十五 段 (目離れせぬ雪)

むかし、男ありけり。わらはより仕うまつりける君、御ぐしおろし給うてけり。正月にはかならずまうでけり。おほやけの宮仕へしければ、常にはえまうでず。されど、もとの心うしなはでまうでけるになむありける。むかし仕うまつり人、俗なる、禪師なる、あまたまゐり集まりて、正月なればことだつとて、おほみきたまひけり。雪こぼすがごと降りて、ひねもすにやまず。みな人急ひて、雪に降り籠めるられたりといふを題にて、うたありけり。

思へども身をしわけねばめかれせぬ

雪のつもるぞわが心なる

とよめりければ、みこ(親王) いたいたうあはれがり給うて、御ぞぬぎて給へけり。

第八十六段 (おのがさまさま)

むかし、いと若き男、若き女をあひいへりけり。おのおの親ありければ、つゝみていひさしてやみにけり。年ごろ経て女のもとに、なほ心ざしはたさむとや思ひけむ、男うたをよみてやれりけり。

今までに忘れぬ人は世にあらじ

おのがさまさま年の経ぬれば

とてやみにけり。男も女もあひ離れぬ宮仕へになむいでにける。

第八十七段 (布引の滝)

むかし、男、津の国むばらのこほり(菟原の郡) 芦屋の里にしるよしして、いきて住みけり。昔の歌に、

あしの屋のなだの塩焼きいとまなみ

つげ(黄楊)のをぐし(小櫛)もささず来にけり

とよみけるぞ、この里をよみける。ここをなむ芦屋の灘とはいひける。この男、なま宮仕へしければ、それを使りにて、ゑふのすけ(衛府佐)ども集まり来にけり。この男のこのかみもゑふのかみ(衛府佐)なりけり。その家の前の海のほとりに遊びありきて、いぎ、この山のかみにありといふ布引の滝見にのぼらむといひてのぼり見るに、その滝ものよりことなり。ながさ二十丈、ひろさ五丈ばかりなる石のおもて、しら

ぎぬ（白絹）に岩を包めらむやうになむありける。さる滝のかみに、わらふだの大ききして、さしいでたる石り。その石のうへに走りかゝる水は、せうかうじ（小柑子）、栗の大ききにてこぼれ落つ。そこなる人にみな滝の歌よます。かのゑふのかみ（衛府督）まづよむ。

わが世をばけふかあすかと待つかひの

涙のたきといづれたかけむ

あるじ、つぎによむ。

ぬき乱る人こそあるらし白玉の

まなくもちるか袖のせばきに

とよめりければ、かたへの人、笑ふ。ことにやありけむ、この歌にめでて止みにけり。帰くる道遠くて、うせにし宮内卿もちよしが家の前くるに日暮れぬ。やどりの方を見やれば、あまのいさり火おほく見ゆるに、かのあるじの男よむ。

はるゝ夜の星か河辺の螢かも

わが住むかたのあまのたく火か

とよみて家に帰りきぬ。その夜、南の風吹きて、浪いとたかし。つとめて、その家のめのこども出でて、うきみる（浮海松）の波によせられたる拾ひて、家のうちにもてきぬ。女方より、そのみる（海松）をたかつき（高坏）にもりて、かしはをおほひていだしたる、かしはにかけり。

わたつみのかざしにさすといはふ藻も

君がためには惜しまざりけり

るなかびと（田舎人）の歌にいは、あまけりや、たらずや。

第 八十八 段 （月をもめでじ）

むかし、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども集りて、月を見て、それがなかにひとり、

おほかたは月をもめでじこれぞこの
つもれば人の老いとなるもの

第 八十九 段 （なき名）

むかし、いやしからぬ男、我よりはまさりたる人を思ひかけて、年
へける。

人知れずわれ恋ひ死なばあぢきなく
何れの神になき名をおほせむ

第 九十 段 （桜花）

むかし、つれなき人をいかでと思ひわたりければ、あはれと思ひけ
む、さらばあすものごしにてもといへりけるを、かぎりなくうれしく、

また疑はしければ、おもしろかりける桜につけて、

桜花けふこそかくにねにほふとも

あな頼みがたあすの夜のこと

といふ心ばへもあるべし。

第九十一段 (惜しめども)

むかし、月日のゆくへをさへ嘆く男、三月つごもりがたに、

をしめどもはるのかぎりのけふの日の

夕暮れにさへなりにけるかな

第九十二段 (棚なし小舟)

むかし、恋ひしきに来つゝつかへれど、女にせうそこをだにえせでよめる。

あし辺こぐたなゝし (葦べ漕ぐ棚なし) 小舟いくそたび

行きかへるらむ知る人もなみ

第九十三段 (たかきいやしき)

むかし、男、身はいやしくて、いとになき人を思ひかけたりけり。
すこし頼みぬべきさまにやありけむ、ふ(臥)して思ひ、起きて思ひ、
思ひわびてよめる。

あふなあふな思ひはすべしなぞへなく

高いいやしき苦しかりけり

むかしもかかることは、世のことわりにやありけむ。

第九十四段 (紅葉も花も)

むかし、男ありけり。いかゞありけむ、その男すまずなりにけり。の
ちに男ありけれど、子あるなかなりければ、こまかにこそあらねど、
時々ものいひおこせけり。女方に、絵かく人なりければ、かきにやれり
けるを、今の男のものすとて、ひとひ(日)ふつかおこせざりけり。か
の男いとつらく、おのが聞ゆる事をば、今までたまはねば、ことわりと
おもへど、なほ人をばうらみつべきものになむありけるとて、ろうじて
よみてやれりける。時は秋になむありける。

秋の夜は春日わするゝものなれや

霞に霧やちへ(千重)まさむらむ

となむよめりける。女、かへし、

ち(千)ぢの秋ひとつの春にむかはめや

もみじ花もともにこそ散れ

第九十五段 (彦星)

むかし、二条の後に仕うまつる男ありけり。女の仕うまつるを、つねに見かはして、よぼひわたりけり。いかでものごしに對面して、おぼつかなく思ひつめたること、すこしはるかさむといひければ、女、いとしのびて、ものごしに、逢ひにけり。物語などして、男、

彦星に恋はまさりぬ天の河

へだつる関をいまはやめてよ

この歌にめでて、あひにけり。

第九十六段 (あまのさかて)

むかし、男ありけり。女をとかくいふこと月日へにけり。いは(石)木にしあらねば、心苦しとや思ひけん、やうやうあはれと思ひけり。そのころ水無月のもちばかりなりければ、女、身にかさ(瘡)一つ二つ出できにけり。女いひおこせたる。今はなにの心もなし。身にかさ(瘡)も一つ二つ出でたり。時もいと暑し。すこし秋風ふきたちなむ時、かならずあはむといへりけり。秋まつころほひに、こゝかしこよりその人のもとへいなむずなりとて、くぜちい(口舌)出できにけり。さりければ、女のせうと、にはかに迎へに来たり。されば、この女、かへでの初もみぢをひろはせて、歌をよみて、書きつけておこせたり。

秋かけていひしながらもあらなくに

この葉降りしくえにこそありけれ

と書きおきて、かしこより人おこせば、これをやれとていぬ。さて、やがて後、つひにけふまでしらず。よくてやあらむ、あしくてやあらむ、いにし所もしらず。かの男は、あまのさかて（天の逆手）をうちてなむのろ（呪）ひをるなむ。むくつけきこと。人のゝろ（呪）ひごとは、負ふものにやあらむ、負はぬものにやあらむ、今こそは見めとぞいふなる。

第九十七段（四十の賀）

むかし、堀川のおほいまうちぎみと申すいまそかりけり。四十の賀、九条の家にてせられける日、中将なりけるおきな、

さくら花散りかひ曇れ老いらくの

来むといふなる道まがふがに

第九十八段（梅の造り枝）

むかし、おほきおほいまうちぎみ（太政大臣）と聞ゆる、おはしけり。仕うまつる男、なが月ばかりに、梅のつくり枝にきじ（雉）をつけて、たてまつ（奉）るとて、

わがたのむ君がためにと折る花は

ときしもわかぬものにぞありける

とよみてたてまつ（奉）りたりければ、いとかしこくおかしがり給ひて、使に禄たまへりけり。

第九十九段 （ひをりの日）

むかし、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車に、女の顔の、したすだれ（下簾）よりほのかに見えければ、中将なりける男のよみてやりける、

見ずもあらず見もせぬ人の恋ひしくは

あやなくけふやながめ暮さむ

かへし、

知る知らぬ何かあやなくわきていわむ

思ひのみこそしるべなりけれ

のちは誰と知りにけり。

第一百段 （忘れ草）

むかし、男、こうりやうでん（後涼殿）のはさまを渡りければ、あるやんごとなき人の、御つぼね（局）より、わすれぐさ（忘草）をしのぶ

ぐさ（忍草）とやいふとて、出ださせ給へりければ、たまはりて、

忘草生ふる野辺とはみ（見）るらめど

こはしのぶなりのちもたのまむ

第百一段 （藤の花）

むかし、さひやうゑのかみ（左兵衛督）なりける在原の行平といふありけり。その人の家によき酒ありと聞きて、うへにありけるさちゆうべん（左中弁）藤原のまさちか（良近）といふをなむ、まらうどぎねにて、その日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて、かめ（瓶）に花をさせり。その花のなかに、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ三尺六寸ばかりなむありける。それを題にてよむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじし給ふと聞きて来たりければ、とらへてよませける。もとより歌のことは知らざりければ、すまひけれど、しる（強）ひてよませければ、かくなむ。

咲く花のしたにかくる人を多み

ありしにまさる藤のかげかも

などかくしもよむといひければ、おほきおとゞ（太政大臣）の栄華のさかりにみまそかりて、藤氏のことにも栄ゆるを思ひてよめるとなむいひける。みな人そしらずになりけり。

第百二段 （世の憂きこと）

むかし、男ありけり。歌はよまざりけれど、世の中を思ひしりたりけり。あてなる女の尼になりて、世の中を思ひう（倦）んじて京にもあらず、はるかなる山里に住みけり。もとしぞく（親族）なりければ、よみてやりける。

そむくとて雲には乗らぬものなれど

世の憂きことぞよそになるてふ

となむいひやりける。齋宮の宮なり。

第 百三 段 （寝ぬる夜）

むかし、男ありけり。いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけり。深草のみかどになむつかうまつりける。心あやまりやしたりけむ、みこたちの使ひ給ひける人をあひいへり。さて、

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめば

いやはかなにもなりまさるかな

となむよみてやりける。さる歌のきたなげきよ。

第 百四 段 （賀茂の祭）

むかし、ことなる事なくて尼になれる人ありけり。かたちをやつし

たけれど、物やゆかしかりけむ、賀茂の祭見にいでたりけるを、をとこ
歌よみてやる。

世をうみのあまとし人を見るからに

めくはせよとも頼まるゝかな

これは、齋宮の物見たまひける車に、かくきこえたりければ、見さし
てかへり給ひにけりとなむ。

第 百五 段 (白露)

むかし、男、かくては死ぬべしといひやりければ、女、

白露はけなばけななむ消えずとて

玉にぬくべき人もあらじを

といへりければ、いとなめしと思ひけれど、こころざしはいやまさり
けり。

第 百六 段 (龍田河)

むかし、男、親王たちのせうえう (逍遙) し給ふ所にまうでて、龍田
川のほとりにて

ちはやぶる神代もきかず龍田河

からくれなゐに水くくるとは

第 百七 段 (藤原の敏行)

むかし、あてなる男ありけり。その男のもとなりける人を、内記にありける藤原の敏行といふ人よばひけり。されど若ければ、文もをさをさしからず、言葉もいひ知らず、いはんや歌はよまざりければ、かのあれじなる人、案を書きてかゝせてやりけり。めでまどひにけり。さて男のよめる、

つれづれのながめにまさる涙川

袖のみひぢて逢ふよしもなし

かへし、れいの男、女にかはりて、

浅みこそ袖はひづらめ涙川

身さへながると聞かばたのまむ

といへりければ、男いといたうめでて、いままでまきて文箱に入れてありとなむいふなる。男文おこせたり。えてのちの事なりけり。雨の降りぬべきになむ見わづらひ侍る。身さいはひあらば、この雨は降らじといへりければ、例の男、女に代りてよみてやらす。

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ

身をしる雨は降りぞまされる

とよみてやれりければ、蓑も笠もとりあへで、しとゞに濡れてまどひ

きにけり。

第 百八 段 (浪こそ岩)

むかし、女、人の心をうら(怨)みて、

風吹けばとはに浪こそいはなれや

わが衣手のかわく時なき

と、常のことぐさにいひけるを、聞きおひける男、

よひ毎にかはづ(蛙)のあまた鳴く田には

水こそまされ雨は降らねど

第 百九 段 (人こそあだに)

むかし、男、友だちの、人を失へるがもとにやりける

花よりも人こそあだになりけれ

いづ(何)れをさきに恋ひむとか見し

第 百十 段 (魂むすび)

むかし、男、みそかにかよふ女ありけり。それがもとより、こよひ夢になむ見え給ひつるといへりければ、男、

思ひあまり出でにしたま（魂）のあるならむ

夜深く見えばたま（魂）むすびせよ

第 百十一 段 （まだ見ぬ人）

むかし、男、やむごとなき女のもとに、なくなりにはけるをとぶらふやうにて、いひやりける。

いにしへ（古）はありもやしけむ今ぞ知る

まだ見ぬ人を恋ふるものは

かへし、

したひも（下紐）のしるしとするも解けなくに

かたるがごと（如）はこひずぞあるべき

また、返し、

恋ひしとはさらにいはじしたひも（下紐）の

解けむを人はそれと知らなむ

第 百十二 段 （須磨のあま）

むかし、男、ねむごろにいひ契れる女の、ことざまになりにつければ、

須磨のあまの塩焼く煙風をいたみ

思はぬ方にたなびきにけり

第 百十三 段 (短き心)

むかし、男、やもめにて居て、

ながからぬ命のほどに忘るゝは

いかに短き心なるらむ

第 百十四 段 (芹河に行幸)

むかし、仁和の帝、せり(芹)川に行かう(幸)し給ひける時、いまはさること似げなく思ひけれど、もとつきにける事なれば、大鷹の鷹飼にてさぶらはせ給ひける、すりかりぎぬ(摺狩衣)の袂に、書きつける。

翁さび人などがめ(咎)めそ狩衣

けふばかりとぞたづ(鶴)も鳴くなる

おほやけの御けしきあしかりけり。おのがよはひを思ひけれど、若からぬ人は聞きおひけりとや

第 百十五 段 (都島)

むかし、みちの国にて、おとこ(男)女すみけり。おとこ(男)、都へいなむといふ。この女いと悲しうて、馬のはなむけをだにせむとて、おきのゐて都島といふ所にて酒飲ませてよめる。

おきのゐて身を焼くよりも悲しきは

都のしまべの別れなりけり

第 百十六 段 (浜びさし)

むかし、男、すゞろにみちの国まで惑ひいにけり。京の思ふ人にいひやる。

浪間より見ゆる小島の浜びさし

ひさしくなりぬ君に逢ひみで

なに事も皆よくなりにけりとなむるひやりける

第 百十七 段 (住吉に行幸)

むかし、帝、住吉に行幸し給ひけり

我見てもひさしくなりぬ住吉の
岸のひめ松いく代へぬらむ

おほむ（御）神げぎやう（現形）し給ひて、

むつまじと君は白浪づがき（瑞籬）の
久しき世よりいはひそめてき

第 百十八 段 （絶えぬ心）

むかし、男、久しく音もせで、わするゝ心もなし。まるり来むとい
へりければ、

玉葛はふ木あまたになりぬれば
絶えぬこころのうれしげもなし

第 百十九 段 （かたみ）

むかし、女、あだなる男のかたみとて、置きたるものどもを見て、
かたみこそ今はあだなくこれなくは
忘れるゝ時もあらまほしきものを

第 百二十 段 (筑摩の祭)

むかし、男、女のまだ世へずと覺えたるが、人の御もとにしのびても
の聞えてのち、ほどへて、

つくま (近江) なる筑摩の祭とくせなむ

つれなき人の鍋のかず見む

第 百二十一 段 (梅壺)

むかし、男、梅壺より雨にぬれて人のまかりいづるをみて、

鶯の花を縫ふてふ笠もがな

ぬるめる人にきせてかへさむ

かへし、

鶯の花を縫ふてふ笠はいな

おもひをつけよほ (乾) してかへさむ

第 百二十二 段 (井出のたま水)

むかし、男、契れることあやまれる人に、

山城のゐで（井出）のたま水手にむせび
頼みしかひもなき世なりけり

といひやれど、いらへもせず

第 百二十三 段 （深草）

むかし、男ありけり。深草に住みける女を、やうやうあきがたにや思
ひけむ、かゝる歌をよみけり

年を経てすみこし里を出でていなば

いとゞ深草野とやなりなむ

女、かへし、

野とならばうづら（鶉）となりて鳴きをらむ

狩だにやは君はござらむ

とよめるけるにめでゝ、ゆかむと思ふ心なくなりけり

第 百二十四 段 （我とひとしき人）

むかし、男、いかなりけることを思ひける折にかよめる

思ふこといはでぞたゞに止みぬべき

我とひとしき人しなれば

第 百二十五 段 (つひにゆく道)

むかし、男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、

つひにゆく道とはかねて聞きしかど

きのふけふとは思はざりしを

いくつかの写本から、
私が読みやすく、理解しやすい
漢字等を選択・混合しています。

小島健治
<https://kenjikojima.com/>